

伊勢物語『初冠』確認テスト 解答・解説

■ 解答・解説

問1 読み…ういこうぶり（ういこうぶり／はつかうぶり）。意味…元服（成人式）。男子が成人して初めて冠をつけること。ここから「男」が大人の仲間入りをしたばかりであることがわかる。

問2 「（領地として）治めている縁（つて）があつて」。「しる」は「領る（知る）」で“領有する・支配する”の意。春日の里に所領の縁があつたので、ということ。

問3 「たいそう優美で（若々しく美しく）色っぽい」。「なまめく」は“上品で美しい・若々しく艶がある”の意。

問4 (1) 垣間見 (2) 物のすきま（垣根など）からこっそりとのぞき見ること。男がその姉妹をのぞき見たのである。

問5 「思いがけず・意外にも」。「思ほゆ」（自然と思われる）＋打消で、“予想もしないことに”の意。

問6 イ。「はしたなし」は“中途半端だ・きまりが悪い・その場にすぐわず落ち着いたかない”の意。ここでは、ひなびた古都に不釣り合いなほど美しい姉妹がいて、場ちがいで落ち着いたかない気持ちを表す。

問7 （例）思いがけず美しい姉妹を見て心を奪われたから。（25字以内） ※「ふる里に（不似合いなほど美しい姉妹がいて）はしたなく感じ、心が乱れた」という流れをおさえる。

問8 着ていた狩衣が、乱れ模様の「しのぶずり」であつたから。男は、その模様の「乱れ」を自分の心の「乱れ」に重ね、即興の風流として、その布（裾）を切り取ってそこに歌を書きつけ贈つたのである。

問9 (1) 春日野の若紫のすり衣 (2) 「しのぶ（忍ぶ）」に、衣を染めた草の名「しのぶ（信夫／忍ぶ草）＝しのぶずりの模様」と、人を恋慕う「忍ぶ（恋慕の情）」の二つが掛けられ、「乱れ」も“模様の乱れ”と“心の乱れ”を掛ける。(3)（例）春日野の若々しい紫草で染めた、この信夫摺りの衣の模様の乱れのように、（あなたを慕う）私の心の乱れは際限も知られないほどです。

問10 ア（自発の助動詞「る」の未然形）。「知ら+れ+ず」で、“自然と知られる”という自発。打消「ず」に続くので未然形。「（心の乱れは）どこまでとも自然とわからない＝際限がない」の意。

問11 ア（成長して大人びて、の意）。「生ひ付く」で“一人前に成長する・大人びる”。元服したての男が早速に大人らしく歌を詠みかけた、という含み。

問12 「風流だ・趣がある」。ここでは“しゃれている・気がきいている”の意で、こうした即興の振る舞いを「風流なことだ」と思ったのだろう、ということ。

問13 (1) 本歌取り (2) これは「男が詠んだ歌」ではない。男が贈つた第一首が「みちのくの忍ぶもぢずり……我ならなくに」という古歌（源融の歌）の趣向（心ばへ）を下敷きにしていることを示すために、語り手が引用した歌である。

問14 「誰のせいで」。「ゆゑに」は“～が原因で・～のせいで”。

問15 「そめ」に、衣を「染め」るの「染め」と、心が乱れ「初め」る（＝乱れ始める）の「初め」が掛けられている。

問16 (1) 「な」＝打消の助動詞「ず」の古い未然形「な」、「く」＝活用語を体言化する接尾語（ク語法）、「に」＝原因・逆接などを表す接続助詞（詠嘆を伴う）。あわせて「～ないのに（…ではないのに）」の意。
(2) (例) (あなた以外の) 私のせいではないのに。＝心が乱れ始めたのはあなたのせいなのに、というニュアンス。

問17 男が即興で詠んだ第一首は、古くからある「みちのくの忍ぶもぢずり……」の歌の趣向（しのぶずりの乱れに恋心の乱れを重ねる発想）をふまえたものだ、という意味。つまり第二首は男の自作ではなく、第一首の「下敷き（本歌）」として示された古歌である。

問18 元服したての若者が、美しい姉妹に心を乱したその場で、着ていた狩衣の裾を切り、古歌をふまえた洒落た歌を即座に詠みかけるという、すばやく機転のきいた、都会的で洗練された風流心。

問19 (1) 歌物語 (2) 在原業平 (3) イ（平安時代）

問20 イ。男は美しい姉妹を垣間見て心が乱れ、その動揺のままに狩衣の裾を切って即興の歌を贈った（「心地まどひにけり」「歌を書きてやる」）。ア（正式な求婚ではない）、ウ（先に贈ったのは男の方）、エ（歌は実際に贈っている）はいずれも本文と合わない。
